

# 羽尾の瘡守稲荷神社

「さらしなの里古代体験パーク」西側の明治新道を挟んだ堂城山の東裾にいくつもの赤い鳥居が連なっています。その鳥居をくぐり一段と高い場所にでると地元で「かさもりさん」と親しまれている「瘡守稲荷神社」があります。今年も、年2回の例祭（節分祭・春季例祭）が盛大に執り行われ、近隣からの多くの参詣者でにぎわいました。

また、月並祭（1日と15日）は、早朝6時に宮本組の役員により執り行われ、その太鼓の音とともに、近在の抛り所の神社となっています。



連なった鳥居

祭神は、倉稻魂命（稲荷大神）を筆頭に、大國主命・太玉命・大宮姫命（大宮売神）・保食命の五社大神が合祀されています。

「神社縁起」には「天正年中頃羽尾筑前なるもの宮守を命ぜられ、後に諏訪の戦いに従い、戦場にて傷を負い大いに悩まされたが、稲荷大明神を一心に念じ、その結果、全快した。これより瘡守稲荷というようになった」と伝えられます。「瘡」とはできもの・傷のことです。かつては本殿の板壁に羽尾の民話で語り継がれている「泥団子伝説」「摩り石伝説」等の絵図が掲示されていました。何れも病平癒を願ったものです。現在の神社建物は、大正後期に建てられましたが、江戸時代以前の場所と建物については諸説あり、場所は合祀前の夫々の小社の所在地だったと推測されます。建物も社務所内に掲示の絵図から現在と同等の規模であったようです。

現在の「瘡守稲荷神社」として形態が整備されたのは、文政10年（1827）からで、天保6年（1835）に、伏見稲

荷神社から正一位稲荷大明神の社号をいただいています。これ以降、瘡守稲荷として信仰され、その社名故、一時は近郷花街からの参詣が絶えず、地元の人々から、養蚕の守護神、五穀豊穡の神様として崇拜されてきました。本殿祭壇裏の外壁には、今は安全のため網で塞がれていますが、小動物が出入り出来る円形の穴が開いています。これは、お稲荷さんに仕える狐の出入り口として設けられたもので、好物と言われる油揚げをこの入り口にお供えする習わしがありました。今となっては知る人も少なくなりまし

た。時代とともに、信仰の形態も変わりつつある神社ですが、越年初詣でに始まり、節分祭のまえに行われる境内の注連縄張り替えは、役員と地域有志の一大行事となっています。中でも3本の大注連縄づくりは後継者を育て、地域の貴重な財産を継承していくためにも大切な場所です。

また、再建当初から趣のあった本殿の茅葺き屋根は、茅材の入手難等から昭和50年を最後に修繕が途絶えていました。由緒ある神社存続のため、平成18年に改修委員会が設けられ、同年12月に銅板葺きの本殿屋根の改修工事が終わり、今は落ち着いた風合いの本殿を見ることが出来ます。その後にも、階段の手すりの設置等もおこなわれ、訪れる人々が地元の優しさや思いやりを感じられる神社となっています。

羽尾 北村主計



銅板葺きの屋根の本殿

